

第1章 2003年度京都大学構内遺跡調査の概要

上原真人 清水芳裕 伊藤淳史

1 調査の経過

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘・試掘・立合にわけて実施している。2003年度には、以下のように発掘調査3件、立合調査11件を実施した。

発掘調査	医学部学友会館新営その他工事（医学部構内A R19区）	（第2章，図版1－298）
	北部総合研究棟（農・生命）新営工事（北部構内B F32区）	（第3章，図版1－299）
	南部総合研究実験棟新営その他工事（医学部構内A P18区）	（第4章，図版1－308）
立合調査	南部基幹・環境整備（特高受変電設備新営その他）工事（病院構内A G15区）	（第1章，図版1－309）
	南部総合研究棟（薬学系）新営（薬学部構内A K15区）	（第1章，図版1－310）
	北部総合研究棟（農・生命）新営その他工事（外構工事）（北部構内B F32区）	（第1章，図版1－311）
	共通教育棟新営その他工事（吉田南構内A Q25区）	（第1章，図版1－312）
	工学部4号館改修工事（本部構内A Y23区）	（第1章，図版1－313）
	北部総合研究棟（化学系）電気・雨水等配管工事（北部構内B C29区）	（第1章，図版1－314）
	医学部構内環境整備工事（医学部構内A Q19区）	（第1章，図版1－315）
	中央総合研究棟（法・経済学部）改修その他工事（本部構内A V25区）	（第1章，図版1－316）
	湯川記念館改修工事（北部構内B E34区）	（第1章，図版1－317）
	法科大学院フレッツスポット用屋外土木工事（本部構内B A24区）	（第1章，図版1－318）
	原子炉実験所熊取総合研究実験棟新営その他工事（大阪府泉南郡熊取町）	（第1章，表2－319）

2 調査の成果

前節で掲げた発掘調査のうち、整理を終えたものについて、その成果を略述する（括弧内は図版1および表2の地点番号）。なお、医学部構内A R19区とA P18区は第2章と第4章で、北部構内B F32区は第3章で、それぞれ詳述しているので参照されたい。

医学部構内 A R 19区 (298) 医学部構内北東部の調査で、中世・近世白川道に南接している。縄文後期土器を包含する白川系流路、中世の道路状遺構と井戸、幕末期の大量の陶磁器類が出土した土取穴などが見ついている。道路状遺構のうち、ひとつは中世段階の白川道だが、もうひとつは井戸との切り合い関係で13世紀初頭ごろに限定される南北方向のものであった。後者については、きわめて短期間の未知の道路状遺構であり、そのルートと性格の解明が課題として残されることになった。また、幕末期の豊富な陶磁器類については、編年や流通状況を検討していくうえで、きわめて有意な遺構出土の一括資料であり、今後の活用が期待される。

北部構内 B F 32区 (299) 北部構内中央の調査で、縄文時代の北白川追分町遺跡の中心域にあたる。縄文前期以前に比定できる旧地表面、縄文中期末の建物跡の可能性を示す柱穴列、および同時期の焼土や土坑が確認されている。遺物についても、縄文中期後半や中期末の時期を中心として、遺構に伴出した土器資料が多数あるほか、京都盆地最古級と評価できる早期前半大川式古段階の胴部片2点が出土している。縄文時代の集落内部の状況を具体的に示す遺構が確認される事例は、近畿地方ではいまだ多くはなく、集落や住居遺構の研究にとって貴重な成果となるだろう。あわせて出土した土器群も、これまでの追分町遺跡の調査成果から提出されてきた編年研究をさらに充実させることが期待できよう。また、今回は縄文時代の長期にわたる地形変遷も把握されたことから、遺跡の形成過程について、より実証的に議論することが可能となった点も、特筆しておきたい。

医学部構内 A P 18区 (308) 医学部構内北西部の調査で、上述の A R 19区の南西50mにあたる。中世各時期の井戸や土器溜などから多数の土器類が出土しているほか、近世以降の字界に相当する位置に、中世前半期にさかのぼる路面や溝、柱穴列などが検出され、この地域の土地境界の原型が形成された時期を把握することができた。この地点の調査を含めると、医学部構内は、互いに隣接する形でかなりの部分を発掘調査したこととなり、それらから出土した中世の豊富な遺構群と土器・瓦類を総合的に検討して、京近郊の中世集落の具体像を呈示していくことが、今後の課題として求められよう。

以上のように、本年度は、とくに縄文時代と中・近世について顕著な成果が得られた。いずれについても、微視的にも巨視的にも今後十分に検討を深めていく余地が残されており、整理と研究がさらに進展することで、あらたな成果が期待される。